

飴っ子

お正月

作・佐藤吉彦
絵・殿村進



発行●大館市アメッコ市実行委員会
企画●大館市役所 観光物産課

発刊にあたって

「大館アメッコ市」も観光協会をはじめ関係者の血の滲むような努力の積み重ねによって年々新たな趣向が加えられ、県内外の観光客からも注目される行事に成長してまいりましたことはご同慶に存じます。

冬の風物詩「アメッコ市」が秋田を代表するまつりとしてもう一歩ジャンプするために私たちが久しく待ち望んでいたシンボルキャラクター「おころ」が、郷土愛旺盛な佐藤さんと絵馬作家殿村さんの情熱家コンビによってここに誕生をみましたことはよろこびに堪えないところです。

このたびの「おころ」の仕様により「市」が内外に広く知れわたり誘客宣伝の一助となればこれにまさる喜びはありません。発刊に当り、いろいろ労をとっていただきました関係者の皆さんに心から感謝申し上げます。

昭和五十八年二月

大館アメッコ市実行委員会
会長 畠山 健治郎
(大館市長)

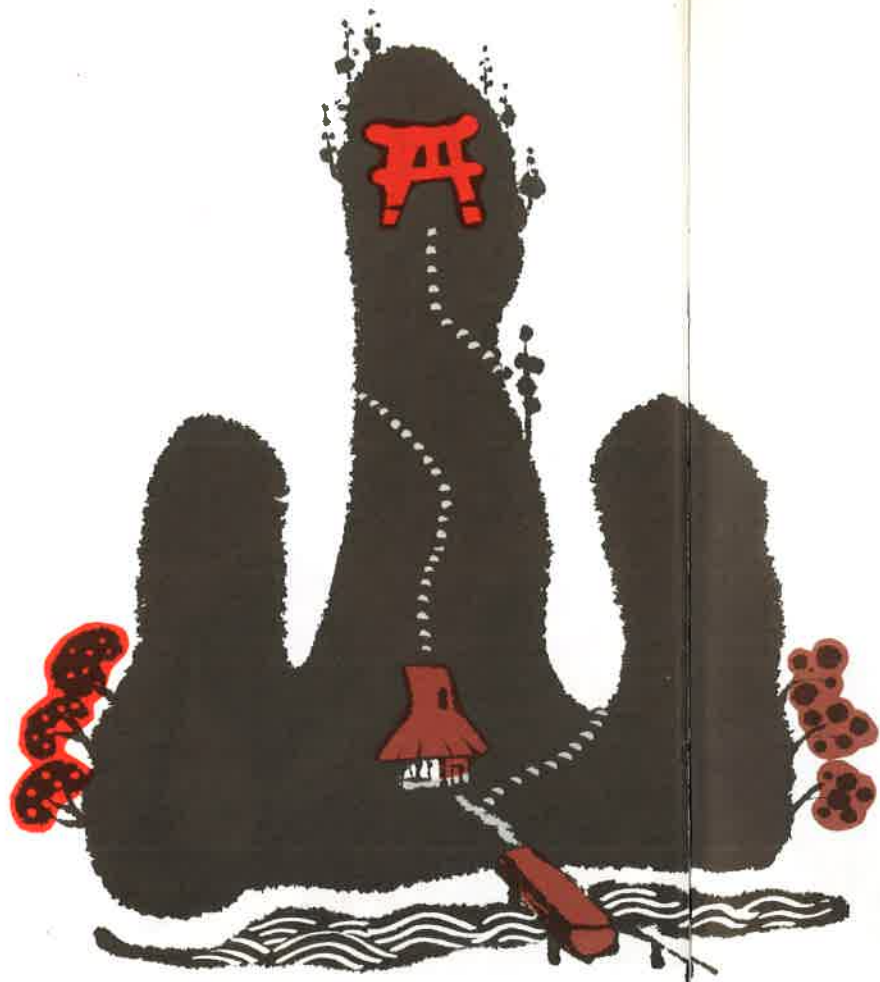


飴っ子

おころ

作・佐藤吉彦
絵・殿村 進

今は 昔の ものがたり
おここの村は まえは川
うしろは 山に かこまれて
春には さくらが 川ぎしに
秋には もみじが 山を巻き
しずかな たのしい 村でした



おこうの 家は 村はずれ
まずしい 小さな わらのやね
やさしい おじいと ふたりきり
はだよせあって くらしてた
おとうも おかあも もうとうに
びょうきで 死んで おりません
おじいは おこうの おやがわり
はたらくときも ねるときも
ふたりはいつも いっしょです



どんなにさむい 冬の夜も
お米のとれぬ けちにも
おこうは あったか はらっぱい
おじいは おこうの まもりがみ
子馬も 子犬も にわとりも
おふくも おさちも よねさくも
みんな おこうの おともだち
おじさん おばさん お年より
村じゅう みんなの にんきもの



三つ 髪置き げんきにと

七つ 帯解き おびき よいこにと

おじいや みんなに 見まもられ

おこうは そだって いきました

おこうが 大きく なるにつれ

おじいは だんだん 年をとる

足こし よわって いきました

山から のわけの ふいたあさ

おじいは ひっそり 死にました

おじさん おばさん やってきて

おじいは お山に はこばれた

くらい 火のない いろいろばた

ぼつつり おこうは すわってた

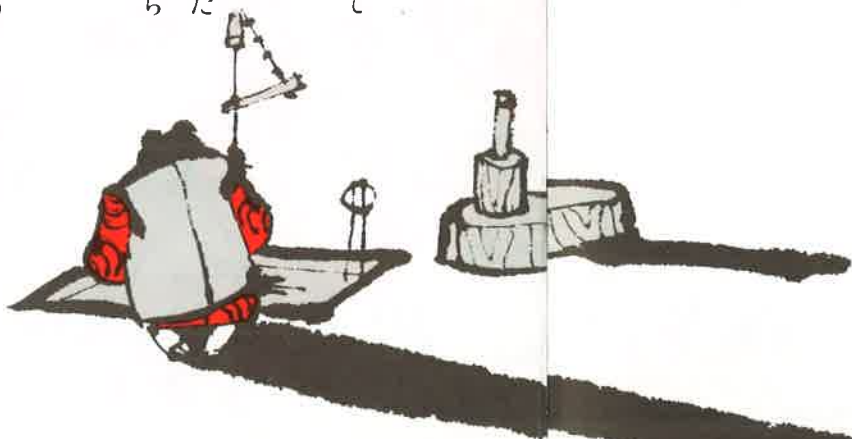
それから おこうは ひとりぼち

山ぎわの雲 赤くそめ

お日さま しずむ 夕ぐれは

お山の おじいに よびかけます

おじいの すがたが 見えるのです







おこうは くじけず はたらいた
むかいの 赤ちゃん おんぶして
となりの 子馬に えさやって
たんぼに おひるを はこびます
あせをながして きをはって
おこうは 村じゅう おてつだい
おふくも おさちも よねさくも
みんな たすけて はげまして
こうして 十五に なりました

この年の秋 雨つづき

おとつい きのう きょうもまた

かみなりひびき 風うなり

しずかな川も あばれだす

「山へにげる」と さけぶこえ

おこうも びつくり とんで だた

みんなは山へと にげるのに

となりの子馬は まちがえて

川へむかって はしります

おこうは 子馬の あとをおう

「お山へ にげよ」と あとをおう

みんなは おこうに さげびます

「子馬にかまわず こつちにこーい」

川は土いろ なみは ほえ

水みなぎって さかまいて

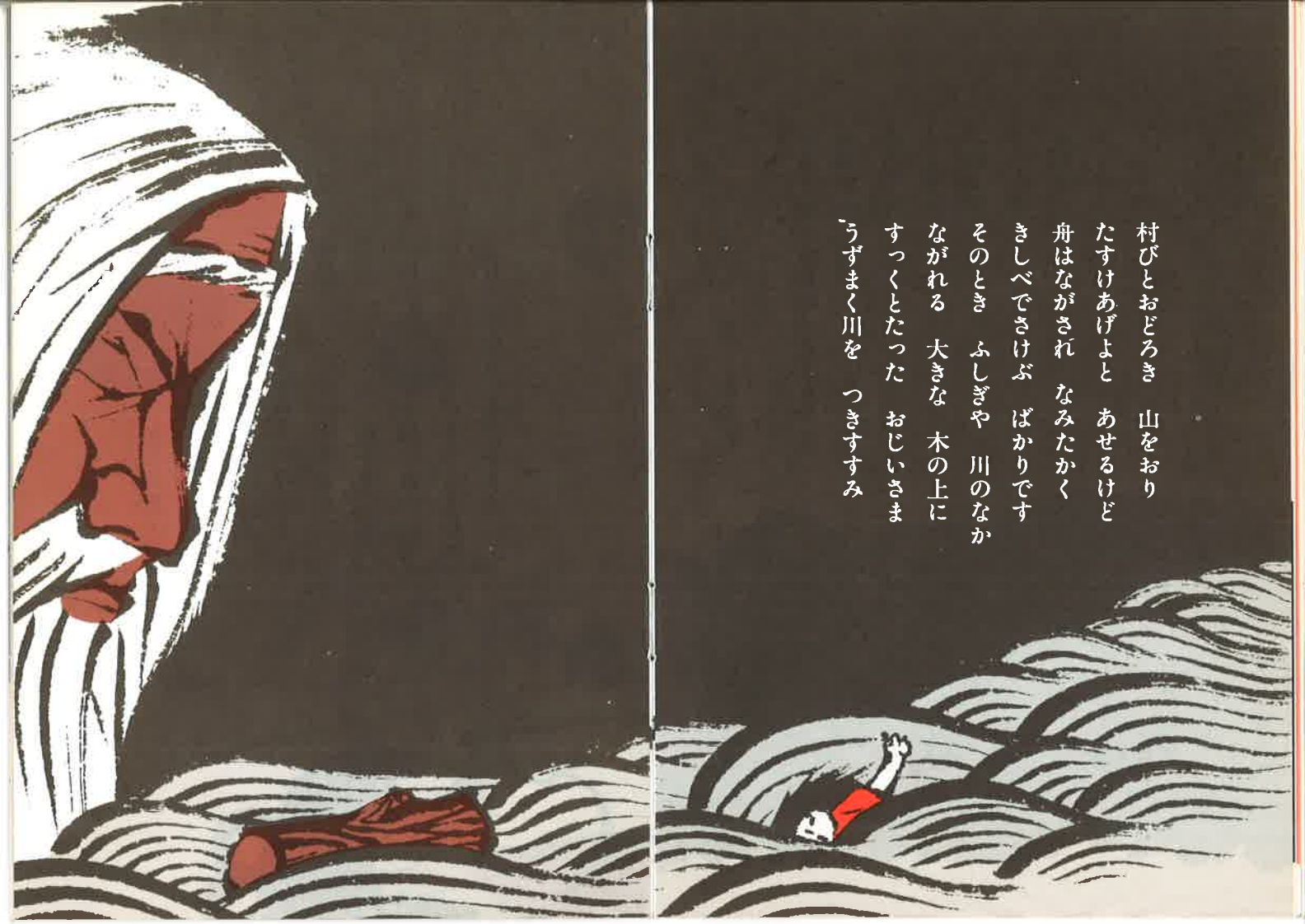
子馬も おこうも のみこんだ

赤いきものに くらいかみ

おこうは ながれて いきました



村びとおどろき 山をおり
たすけあげよと あせるけど
舟はながされ なみたかく
きしべでさけぶ ばかりです
そのとき ふしぎや 川のなか
ながれる 大きな 木の上に
すつくとたつた おじいさま
うずまく川を つきすすみ



おこうと子馬を すくいあげ
きしべによると 草の上
しずかにおいて たちまちに
すがたは 見えなく なりました
雨は いつしか やみました
空も あかるく なりました
けれども おこうは ねつがでて
はくいき すういき くるしげに
三日三ばんも ねむります





ぽっ とめぎめた おこうの手
しんじゆのような 白い玉
十つぶ にぎって おりました
ほんにふしぎな ことばかり
村一ばんの ものしりが
“これは 飴だ” といいました
一つぶたべたら ねつがとれ
二つぶたべたら ちからでて
三つぶで げんきに なりました



”のこった七つの 白い飴

みんなにあげて くださいな”

”それから みなさん わたくしを

町へおくって くださいな”

”町の飴やで はたらいて

飴つくりをば おぼえます

びようきで くるしむ 人たちが

みんな げんきに なるように

くすりの飴を つくります”



一しよけんめい べんきようし

一しよけんめい はたらいて

たちまち おこうは みせじゆうの

だれにも まけない 飴つくり

みんなは おこうを ほめました

だけど おこうは うかぬかお

おいしい飴は つくれても

くすりの飴は まだできぬ

わたしの のぞみは くすり飴

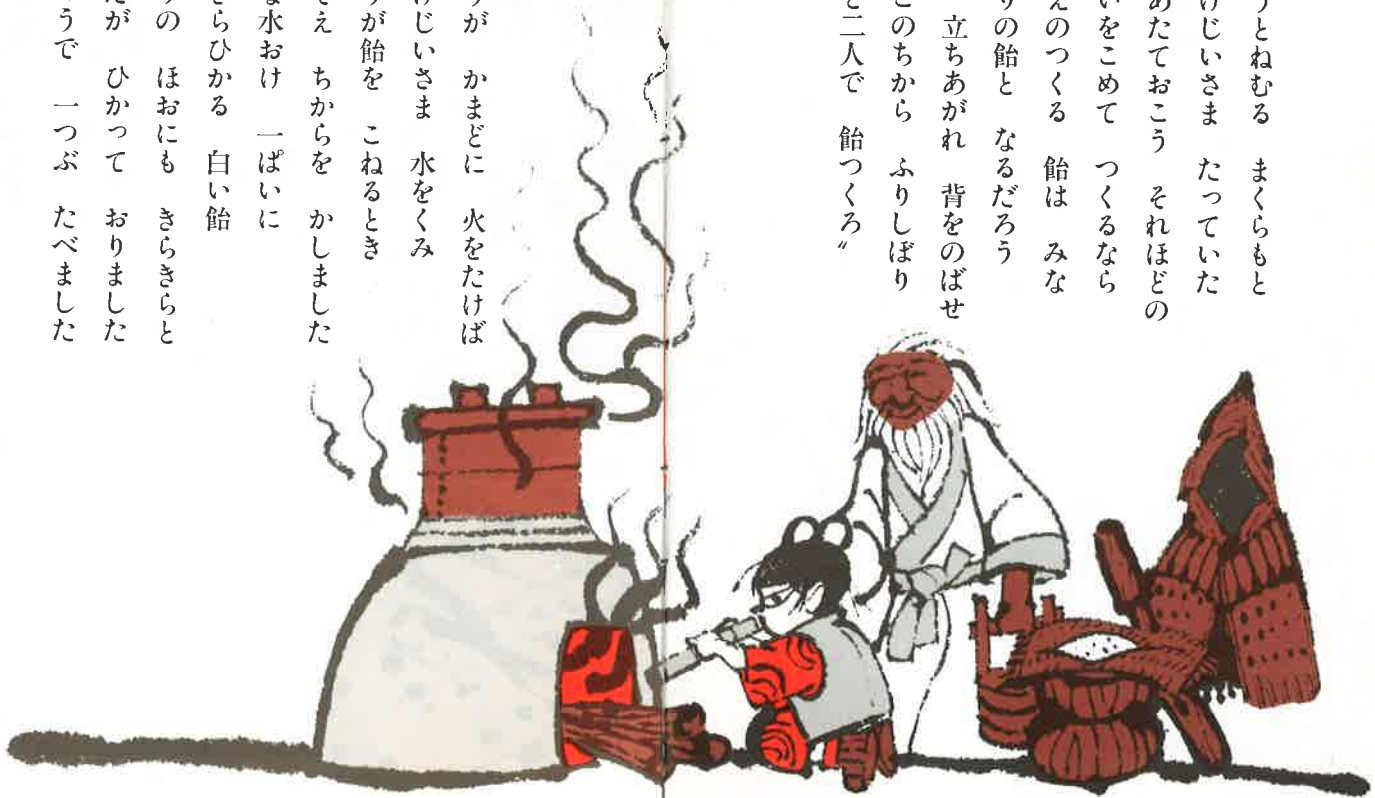


ひるは やすまず しごとして
ねるまも おしんで くふうした
とうとう おこうは つかれはて
やせおとろえて やみついて
さびしく村に かえされた
くやしなみだの まくらべで
村びとたちは なぐさめた
“くすりの飴は できんでも
あまーい飴なら よかろうが”

“いいえ ねがいは ただひとつ
くすりの飴を つくること
おとうも おかあも 村びとも
たくさん びょうきで 死にました
くすりの飴のできるまで
わたしは けっして やめません”
“けれども からだが うごかない
どうぞ かみさま わたくしに
ちからをかせて くださいな”



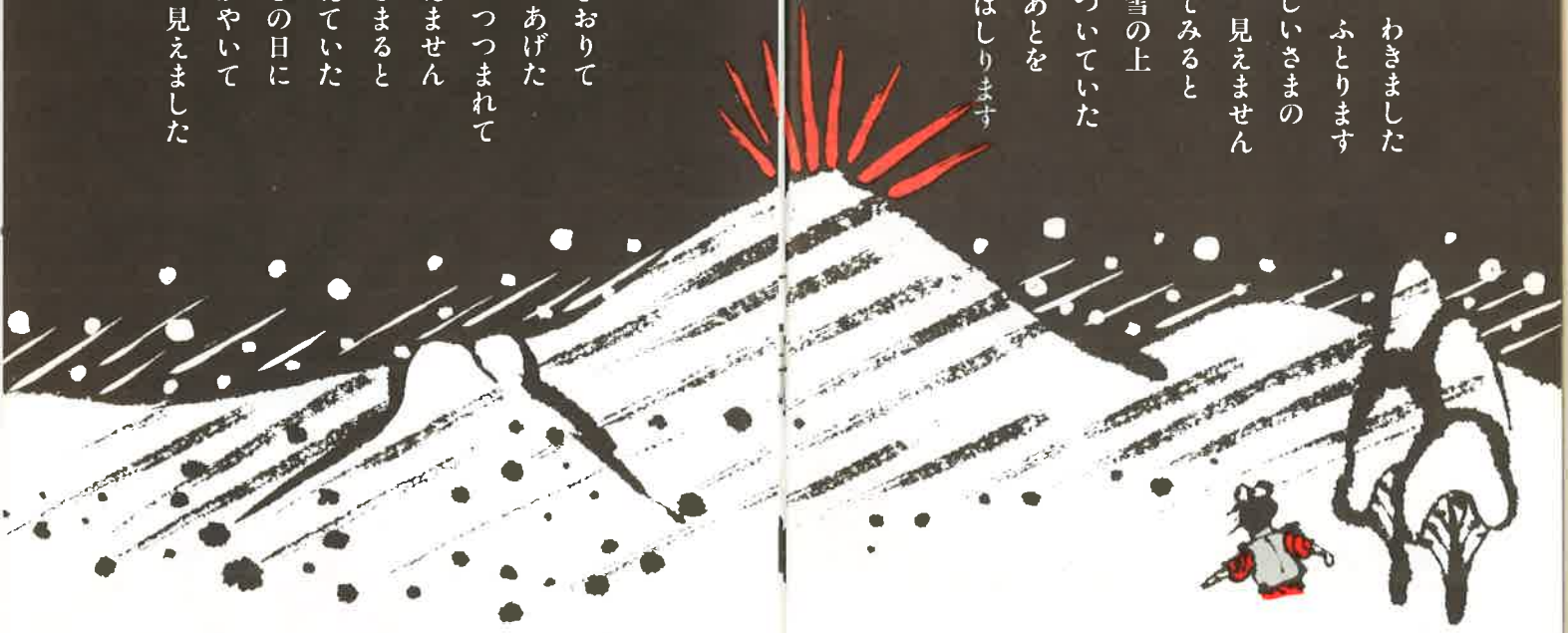
うとうとねむる まくらもと
白ひげじいさま たつていた
「さあたておこう それほどの
ねがいをこめて つくるなら
おまえのつくる 飴は みな
くすりの飴と なるだろう
さあ 立ちあがれ 背をのばせ
さいごのちから ふりしぼり
わしと二人で 飴つくろ」



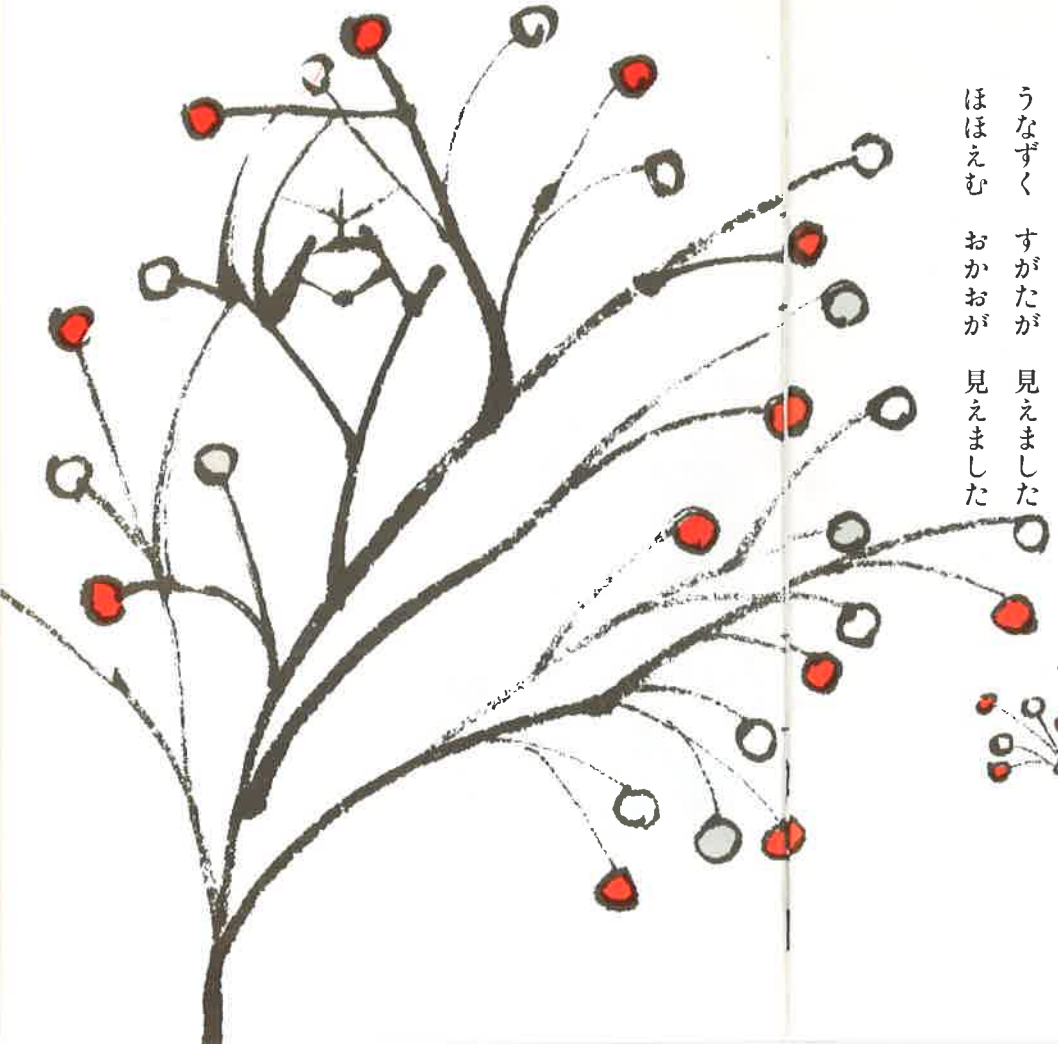
おこうが かまどに 火をたけば
白ひげじいさま 水をくみ
おこうが飴を こねるとき
手をそえ ちからを かしました
大きな水おけ 一ぱいに
きらきらひかる 白い飴
おこうの ほおにも きらきらと
なみだが ひかっぺ おりました
むちゅうで 一つぶ たべました

ふつふつ ちからが わきました
みるみる からだも ふとります
きがつきや 白ひげじいさまの
すがたは どこにも 見えません
あわてて 外に でてみると
ましろにつもった 雪の上
くつきり 足あと ついていた
お山にむかう そのあとを
おって おこうは はしります

そのとき 山風 ふきおりて
こな雪 たかく まいあげた
おこうは ふぶきに つつまれて
前も うしろも 見えません
やがてふぶきが おさまると
もう 足あとは きえていた
おりからのぼる あさの日に
お山は ぽっと かがやいて
かみさま いるよに 見えました



木ぎのこずえの 先ざきに
おこうは 飴を つけました
おれいの 飴を つけました
たむけのしるしと つけました
むねに手あわせ、ありがとう
ございました”と つぶる目に
白いおひげの じいさまの
うなづく すがたが 見えました
ほほえむ おかおが 見えました





今は 昔の ものがたり
おここの村は どここの村
川がながれて 山のある
それは みんなの ふるさとです

〔髪置き・帯解き〕

女の子が三才になると、頭髮をのぼす儀式をし、七才になると、これまでしていた付け帯をとって、普通の帯を用いる祝いをする。男の子は、五才になると「袴着」の祝いをしますが、これが今も行われている、七・五・三のお祝いです。

〔けかち〕

飢渴と書いて、け、かつともいい、飢饉になることです。凶作の年を、け、かちどしといいます。又、単に、け、かちともいいます。

〔たむけ〕

神様や仏様にお供え物をする事。又そのお供え物をいう事もあります。大館地方では、水木の先に、お彼岸やお盆には団子をつけて、餠っこ市には餠をつけて、先祖にたむけます。

「餠っこ市とおこう」

佐藤 吉彦

秋田県の北の町、大館市では、昔から、二月十一日になると、餠売りの市がたち、これを「餠っこ市」といいます。

この餠をたべると、風邪をひかないし、たべないとウジになると言い伝えられ、近郷近在から沢山の人ややってきて、賑わいました。この日は、山の神さへ降りてきて、人にまがれて餠を買い、婦人には、足跡をかくすため、雪を降らせるのだといわれておりました。だから、二月十一日の夜は、大館地方はきつと吹雪になりました。

神様も、欲しがるほどの菓の餠。それはどうしてできたのでしょうか。その言い伝えは、ありません。いわれは誰も知りません。

* * * * *
この辺りの人は、名前の下にコの字をつけてよぶくせがあります。

雪っこ。馬っこ。犬の子っこ。
だから、餠も、餠っこです。でも、「餠っこおこう」の餠っこには、もう、つの意味、「餠の申し子」という意味もあるように思えるのです。

村中の人気者、おこうは、氣だてのやさしい、かわいい女の子だったに違いありません。でも、このかわいいだけの女の子が、十五年の秋の洪水から、憑かれたように、餠つくりのオニとなりました。人の姿をして、神様のような力をもつものを、オニというといいます。菓の餠をつくるために、命をかけるおこうの姿は、いたいたしくもけなげな、美しいオニ——私にはそう思えるのです。そして、この、おこうの変貌の意味するのは、物語りの中からお汲みとりいただけたものと思います。

* * * * *
大館では、今も二月の十一・十二の両日には、大町中央通りに、数百店の市がたち、県内外から沢山の人やきて、餠を求めて帰ります。

誰がつくった餠であらうと、おこうの心を心としてたててくださいるなら、きつと、菓の餠となることでしょう。